

創造へのどん欲な試行

画家が絵を描かないで生きることが出来るか。この人は「できる。そして、できない」と答える。

毎朝、五時に起床。食事は一汁一菜の菜食主義。五時間、六時間とぶっ通しで描き続ける。きびしい修業僧にも似たたん練が毎日続く。そして「絵かきは生きざまだ」というあなたにとって絵とは？という問いに「生きることだ」と答える。それは単純に絵筆に執着することを意味しない。

むしろ、絵に対する画家の慣れを拒否し続けている。

十五年前、前衛画家集団「九州派」を創立した。この集団は石こうデッサンと写実を積み上げた技術主義の場ではなかった。表現とは何か、の大命題にナマ身でぶつかる二十人余りの若い芸術家たちの結合体であった。アトリエの中に収まりようもない大キャンバスに絵の具をたたきつける表現、波打ち際で営々と穴を掘り続ける無為の行為。密教修験を思わせるかがり火のハプニング。大たらいにのたうつドジョウ、張り付けにされた二ワトリおそらく日常の言葉で解釈説明することの不可能な行為が、九州派の若者たちの心をとらえて離さなかった。それは一枚のキャンバスに安住する既成の権威主義への果敢な挑戦であった。

同時に、人間の表現の根源を無意識や無目的の中からくみ上げようとする精神の冒険であった。彼らは、きわめて勤勉な画家であった。創造へのどん欲な試行の熱意は常識をはるかに越えた。

それらのあらゆる軌跡に、桜井孝身という一人の画家の影がうつっている。彼はいう。「絵とは生きることなのだ」と。絵筆を拒否して、いっさいの形の残らない行為に、生活のすべてをかける地点と、朝五時に起床して絵を描き続ける時間、この気の遠くなるほどの振幅がこの人の体内にひそんでいる。だから、ある人は桜井孝身が「絵を描いている」ことに驚く。二度目のアメリカ生活から帰ってきて五カ月ですでに百点を超える制作を蓄積していると聞けば、信じられない、とさえいうだろう。アメリカでは一九六五年から六七年までと、七〇年から七三年までそれぞれ二年ずつ暮らしてきた。サンフランシスコに根拠を置き、大陸を横断してニューヨークからさらにメキシコ、フランスへも足をのばした。戦後アメリカ詩壇の旗手、アレン・ギンズバーグやゲリー・シュナイダーとも寝起きをともにして互いに吸収し合った。壁画を制作し、個展を開き、コンミュンを作り上げた。この人の精神の領域の振幅は直接に行動範囲の広大さと一致する。

画商ルートの投機商品という意味では、この人は売れている画家ではない。経済的にも修行僧を思わせるつつましさの中にある。それでいて、それが何ら行動の制約になっていない。絵を描く障害になっていない。みごとなスケールというべきだろう。

十五日から二十四日まで、福岡市博多区のふくだギャラリーで個展を開いている。展示作品は「女の顔」を中心にまとめられている。髪に花を飾った女たちが、くちびるを結び、目を見開いて画布の奥から何ごとか語りかけてくる。

その女たちはメキシコインディアンのようにも、古代エジプトの女のようにもあり、タヒチの女のようにも、あるいは日本の若い農婦のようにもある。大地と太陽のめぐりの中で生きる女の喜びと根強さが、その女たちの表情にうたい上げられている点で共通する。この「女」たちが、桜井孝身の精神と行為の果てしない冒険の中から生まれた祈りを体現していることは説明するまでもない。この人は「生きることは喜びでなければならない」としばしばいう。この生きる喜びとは、人間の生活が大自然にたたえられる祝祭でありたいという熱望であろう。

現代の文明社会は、生活から人間の根源的な祝祭を追放することによって築き上げられてきた。芸術家の名において、人間の祝祭の復権を求める桜井孝身氏にとっては、まだひとときの休みも与えられない。個展が終わると近々またヨーロッパへ旅立っていくという。個展で飾られたいくつかの作品が、だれかの手もとに残って、一人の果てしない画家のさすらいを追慕し続けることであろう。